

## 東京高等師範学校附属中学校における課外体育活動の歴史

阿部生雄・寶學淳郎・中塚義実\*  
 柳根直\*\*・孫煥\*\*・秋元忍\*\*  
 山本英作\*\*・後藤光将\*\*・池原知也\*\*\*  
 細江順\*\*\*\*・田原貴子\*\*\*\*・美山治\*\*\*\*

### Games and Sports for the Extra-Curricular Activity in the Middle School attached to Tokyo Higher Normal School: 1888 - 1941

ABE Ikuo, HOUGAKU Atsuro, NAKATSUKA Yoshimi\*,  
 YOO Kun Jick\*\*, SON Hwan\*\*, AKIMOTO Shinobu\*\*,  
 YAMAMOTO Eisaku\*\*, GOTO Mitsumasa\*\*, IKEHARA Tomoya\*\*\*,  
 HOSOE Sunao\*\*\*\*, TAHARA Takako\*\*\*\* and MIYAMA Osamu\*\*\*\*

The formation of the extra-curricular activities in the public middle schools was precisely investigated by Tohru Watanabe in his study entitled "The Nation-wide Trend of Sports in Middle School in the Meiji Era" (1978). He concluded that the establishment of the students' bodies governing games and sports after school in the public middle schools emerged intensively during 1892 and 1896, and the most popular activities in the middle schools till 1901 were Japanese martial arts such as kendo, judo, while the western games and sports such as baseball, athletic sports, rowing and tennis were relatively popular among the schools. This study investigated the emergent process of students' body and clubs for games and sports after school in the Middle School attached to Tokyo Higher Normal School (MSTHNS) which was founded in 1888 and became one of the most famous elitist school which sent many students to the leading universities and higher educational institutions. Students' body governing extra-curricular activities was set up in February 1890. The earliest extra-curricular activities in the MSTHNS were "Gisen" (a kind of mock-war) and excursion from which the alpine club derived later. The initiation of "Undo-kai" (a meet for athletic sports) was in 1897, which offered good occasion to introduce boys many sports such as athletic sports, football, basketball, and volleyball. Clubs for sports and games emerged as follows: rowing (1894 or 1900), athletic sports (1897), baseball (1900), judo and kendo (1902), tennis (1904), swimming (1904), alpine club (1916), association football (1923), basketball (1926), Japanese archery (1935), gymnastics (1941), and shooting (1941). The process of formulating extra-curricular activities symbolized the formation of diverse sports clubs in MSTHNS was the parallel and simultaneous process which nourished her color and tradition.

**Key words:** Middle School attached to Higher Normal School, Extra-curricular activities, Students' body, Sports club

\* 筑波大学附属高等学校 University of Tsukuba, senior high school at Ohtsuka

\*\* 筑波大学体育科学研究科 Doctoral program in health and sport sciences, University of Tsukuba

\*\*\* 東京成徳大学 Tokyo Seitoku College

\*\*\*\* 筑波大学体育研究科 Master's program in health and sport sciences, University of Tsukuba

## 1. はじめに

明治5(1872)年、昌平黌跡に設立された師範学校は、明治6年に東京師範学校となり、明治19年の師範学校令によって高等師範学校となった。明治6年1月15日には師範学校生徒の実地授業のために附属小学校が創設されたが、現在の筑波大学附属中学校・附属高等学校の前身である東京高等師範学校附属中学校(以後、高師附中)は、明治21年9月、高等師範学校の附属学校に尋常中学科が設置されたことによって発足したとするのが通例である。昭和33年10月30日、創立70周年の記念式典では、代読という形ではあるが、当時の文部大臣灘尾弘吉は来賓祝辞を寄せ、本校を「中等教育を施す場として、また教育実験校として校運は発展の一路をたどり、常に全国中等教育界に対する指導的な地位に立ち、わが国教育の発展に貢献してきたのでありまして、その教育上の輝かしい業績は、現在約六千名を数える卒業生の社会各方面における顕著な活躍と相まって、世のひとしく認めるところであります」<sup>1)</sup>と表現した。

本研究の目的は、全国の中学校の注目を集めたと考えられる高等師範学校の旧制附属中学校における課外体育の形成過程を明らかにすることである。わが国の中等学校の課外活動に関しては、既に鶴岡英一の「明治期における広島県中学校の校友会運動部について」や平野稔の「大分県における明治体育史の研究—中等学校のスポーツについて」、そして最も体系的な研究として渡辺融の「明治期の中学校におけるスポーツ活動」等の研究がある<sup>2)</sup>。渡辺は①公立中学校校友会の設立は学校設立の新旧にかかわらず、明治25年から34年に集中しており、明治31年には設置率が68.6%に達していること、②公立中学校校友会の運動部におけるスポーツ活動は、初期には撃剣、柔術などの在来武術系のものが優位であり、外来スポーツでは運動会、野球、端艇、テニスが比較的普及していたこと、③公立中学校への外来スポーツの伝播は、種目によって前後があり、大よそ野球、運動会、端艇、テニスの順でなされていること、を指摘している<sup>3)</sup>。高師附中の校友会の設立は明治23年であり、他の公立の中学校よりも早期に設立されたと考えてよからう。

渡辺論文は全国の公立中学校における課外体育活動の組織化の過程を研究対象としたが、未だ、師範学校に附属した中学校におけるその組織化の

過程については十分に研究がなされていない。本研究は、日本で最初の師範学校の附属中学校として、恐らく全国的に注目されたと考えられる高師附中における課外体育活動の組織化の過程を、公立中学校と異なる学校類型における最も早期の一つの事例として、渡辺の指摘する他の公立中学校におけるその組織化の傾向を念頭にいれつつ明らかにしていく。本研究の対象とする年代は、主に高等師範に尋常中学校が設立された明治21年から、課外体育活動が桐陰報国会に改変された昭和16年までとする。

## 2. エリート養成機関としての高等師範附属中学校

高師附中の生徒はどのような家庭の子弟であったのだろうか。明治38(1905)年に在学した生徒351人の族籍をみると、華族16、士族126、平民207、外国人2で、華族1に対し士族8、平民13の比であった。明治42年に在学した生徒371名の場合、華族27名、士族117名、平民225名、外国人1名で、華族1に対し士族4、平民8という比である。恐らく学習院と比べ華族や士族の数は少ないといえよう。親の職業をみると、明治38年の生徒351人の場合、商業88、文官52、銀行会社員40、学校教師37、武官25、医師22、農業6、工業6、弁護士4、その他71という内訳であった。明治42年の生徒371人の親の職業をみると、商業63、銀行会社員60、文官60、医師36、学校教師24、武官19、工業11、農業9、弁護士6、その他83という内訳で、ほぼ同じ傾向を持っている。明治時代の高師附中の生徒はその多くが東京在住の商人、銀行会社員、文官、学校教師、医師といった比較的インテリの職業や実業、公務員の家庭からきていたことが分かる<sup>4)</sup>。高師附中の卒業生は、その殆どが有名大学やそれに類する高等教育機関に進学した。すべての卒業生の進学傾向を示す昭和3年の統計数値は、まだ大学に進学していない卒業生を除いた全卒業生1710人のうち798人が東京帝国大学をはじめとする帝国大学に進学したことを示している。それは約46%の高さにのぼる。私立の大学では慶應大学が132人(7.7%)、早稲田が96人(5.6%)で第一位と第二位をしめる<sup>5)</sup>。(表1)高師附中の一学年の卒業生数は、明治35年に50人台、その後大正末期まで50人から70人、昭和初期に80人から90人という少人数であった。こ

表1 高師附中生徒の進学状況(1893-1928)

	帝大	高商	高工	陸海学校	慶應	早稲田	高校	他	合計
明治26-29	35	1	1	5				20	62
明治30-34	77	11	2	10	3	3		56	162
明治35-39	127	20	7	12	12	18		73	269
明治40-44	112	18	11	8	15	17	2	92	275
大正1-5	157	22	6	3	19	17	12	89	325
大正6-10	186	8	4	6	40	21	9	76	350
大正11-15	104	2	4	3	33	19	100	74	339
昭和2-3			3	3	10	1	75	82	174
合計	798	82	38	50	132	96	198	562	1956

帝大：東京帝国大学等，高商：高等商業学校，高工：高等工業学校，  
陸海学校：陸軍士官学校，海軍士官学校等，高校：一高，二高等  
(尚，この統計は昭和3年度までであることから，大正13年頃から浪人または高校在学者の数が多い)

うしたことから，高師附中は少数精鋭のエリート校であったといえよう。

### 3. 「校友会」と「桐陰会」の結成

高師附中の「校友会」は明治23(1890)年の紀元節(2月11日)に設立された。会員は生徒，教師が補佐にあたり，卒業生を出してからはOBもこれに加わった。創立時の規則は16条から構成され，会計係，編集係，遊戯兼遠足係が設けられていた。発会式には演説や講話の他に撃剣，競争，蹴鞠，綱引き等の運動が行われ，当初から学生と教官の懇親会的性格を強く持つものであった<sup>6)</sup>。その年の11月には編集係は編集係と雑誌係に分けられ，遊戯兼遠足係も遊戯係と遠足係に分けられた。校友会の規則はその後も何度となく改正された。明治24年5月には13条からなる細則が設けられ，翌年の3月にも細則は改正された。明治27年9月にそれは規則15条，細則40条からなる校友会規則に大幅に改正され，この時，初めて「漕艇ニ関スル規則」が設けられた<sup>7)</sup>。生徒の「自主的」な課外活動を組織しようとする動きは，高師附中の場合も例外ではなく，生徒の自発性というよりも教師のイニシアチブによって生じた<sup>8)</sup>。

明治29年に尋常中学科を附属学校小学科から分離し，附属尋常中学校と改称して校舎を神田一ツ橋からお茶の水の高等師範学校内に移転したが，この機を捉えて，校友会組織の更なる改正が行わ

れた。明治30年2月に「校友会」は，高等師範学校の校長で附属中学校の校長も兼ねた嘉納治五郎により「桐陰会」と命名された。その桐陰会規則によると，第一条で目的は「本会ハ校風ヲ振興シ会員ノ厚誼ヲ親密ニシ兼テ講学ノ裨補ヲナスヲ以テ目的トス」とされ，第十条で「本会ハ目的ヲ達センガ為メニ左ノ諸項ヲ挙行ス。一 遠足，遊戯，漕艇其他各種ノ運動，一 講話，一 雑誌ノ編纂」という各部規定が定められた<sup>9)</sup>。目的は変化しないが，課外活動の係が以後何度か変化するので，各部の成立と「校友会」及び「桐陰会」の分掌の系統図を掲げておこう。(図1)

桐陰会の財政基盤は，その大部分が会員の会費に依っていた。表2は年間収入の内訳を示したものである。年間収入の約70%が在校生の普通会员の会費収入で，残りの大部分をOBである特別会員の寄付と教員である参与員の寄付に依っていた。表3は年間桐陰会予算の配分額あるいは費用の支出を示したものである。桐陰会雑誌の発行費用は明治38年まで単独の支出項目として最も多かった。しかし，明治42年には，明治41年に野球や陸上を統括するようになった陸上運動部の予算が雑誌発行費を僅かではあるが上回った。運動部に対する配分額に目をやると，明治33年以来明治42年まで，端艇部と野球部は全体予算の30%を占めており，この当時最も重視されたスポーツであったことがわかる。明治35年に桐陰会の運動部

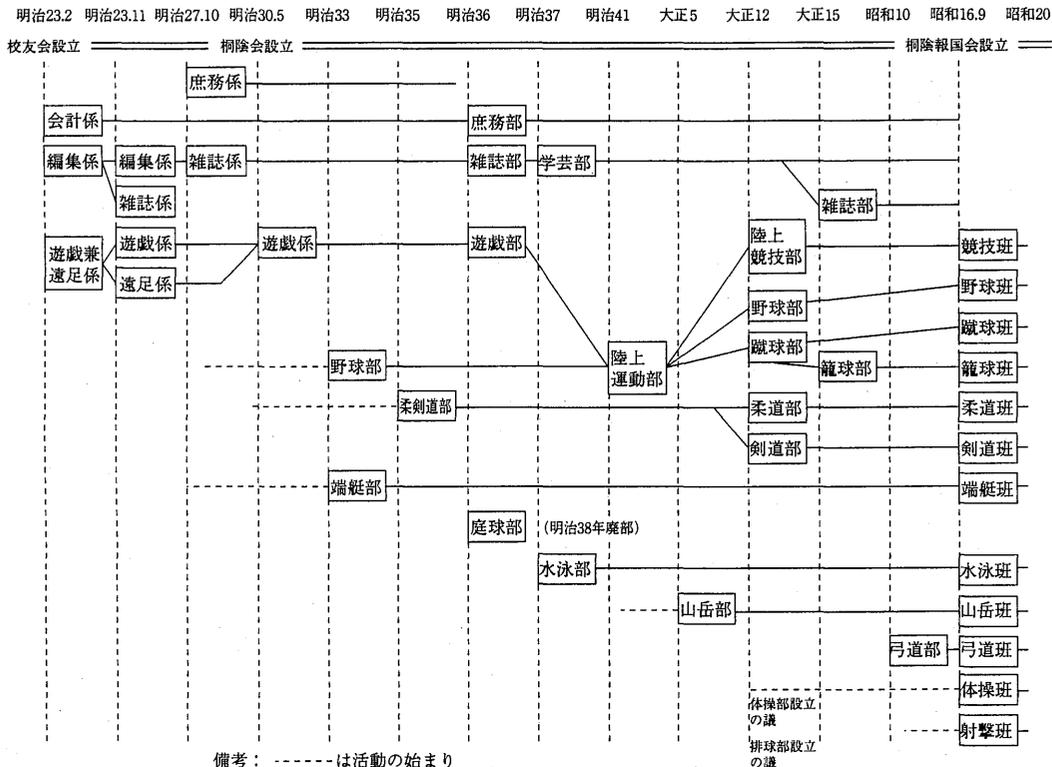


図1 東京高等師範学校附属中学校の課外活動組織の変遷

に位置づいた柔剣道部も、大正時代の初期まで、全体予算の約15%を獲得する有力な部であった。桐陰会規則の大正12年の改正により単独の種目別運動部に再編されるが、それ以後、野球部、端艇部、蹴球部が比較的多くの予算を獲得している<sup>10)</sup>。こうした予算の配分額の相違は、何らかの形で高師附中の課外スポーツの位階を反映しているものと考えられる。(表2, 表3)

4. 運動部形成以前の課外体育活動

各種の体育・スポーツ活動が課外で組織化される以前に、後に運動部に発展を遂げたり、固有な課外活動を形成するに至る未分化な課外の体育活動が存在した。高師附中の場合それは遠足、旅行、擬戦、運動会であった。

1) 遠足、旅行

最も古くから行われている高師附中の課外活動の一つは遠足であった。明治23(1890)年の校友会設立のときに遊戯兼遠足係が設けられ、6月にはその行事として遠足が行われた。明治27~28年に

は年に6回、明治30年以後には年に2~3回遠足が行われ、「学校の遠足行く人多きも、桐陰会の遠足は常に人の少なきを嘆ず<sup>11)</sup>」という記述からもわかるように、学校主催と桐陰会主催の遠足が存在した。桐陰会の遠足の参加は義務でなかった。当時の遠足は、その名の通り遠くまで足で歩くことで、各遠足の行程を見てもかなり遠距離を歩いている。しかし、大正時代に入り、首都圏の交通が発達しても、体の鍛練のために長距離を歩く、強行遠足の会が自発的に出来ているので、それなりの価値を認める生徒も存在した。明治期には、日帰り遠足の他に、年1, 2回の一泊旅行を行っていた。その最初は、明治30年7月の高尾山一泊旅行である。その後、年一回程度行われる様になり、大正期に入ると、この伝統は臨時山岳会(後の山岳部)主催の山岳生活に引き継がれ、大正9年1月から遠足は山岳部の行事に変化した<sup>12)</sup>。

2) 擬戦

擬戦は高師附中の独特の課外行事として発達した。「明治二十六年頃、今までの単純な遠足では

表2 桐陰会年間収入総額の内訳（明治30年から昭和11年）

	明治30年	明治31年	明治32年	明治33年	明治34年	明治35年	明治36年	明治37年	明治38年	明治42年	明治43年	大正9年	大正11年	大正12年	大正14年	大正15年	昭和11年	
普通会員 会費	213,160 (93.2%)	275,900 (71.1%)	317,606 (70.3%)	327,000 (70.3%)	606,350 (75.2%)	590,000 (73.9%)	586,800 (73.7%)	735,000 (76.2%)	715,400 (72.6%)	855,350 (65.0%)	873,600 (57.2%)	1,832,500 (60.3%)	1,950,000 (64.8%)	2,117,500 (59.9%)	2,502,500 (62.1%)	2,645,000 (66.0%)	3,510,000 (67.1%)	
特別会員 会費												843,800 (27.7%)	860,000 (26.6%)	852,000 (24.1%)	1,101,470 (27.3%)	1,016,850 (25.7%)	1,400,000 (26.7%)	
寄 附 金	特別会員 寄附		27,300 (6.0%)	18,250 (3.9%)	52,350 (6.5%)	55,600 (7.0%)	66,550 (8.3%)	80,000 (8.3%)	102,000 (10.3%)	111,000 (8.4%)	219,000 (14.3%)							
	参与員 寄附			15,38 (3.4%)	50,950 (10.9%)	103,450 (12.8%)	110,450 (13.8%)	108,810 (13.7%)	100,000 (10.3%)	119,150 (12.1%)	132,490 (10.1%)	155,440 (10.2%)	198,770 (6.5%)	200,000 (6.6%)	232,930 (6.6%)	244,750 (6.1%)	281,550 (7.1%)	300,000 (5.7%)
	客員寄附	7.15 (3.1%)	66,727 (17.2%)															
	職員寄附									20,740 (1.6%)								
	桐陰会 寄附									27,000 (2.1%)	42,000 (2.8%)							
5年級 寄附				2,650 (0.6%)														
学校補助金										110,190 (8.4%)	38,970 (2.6%)							
雑収入				11,245 (2.5%)	29,975 (3.7%)	3,185 (0.4%)	5,840 (0.7%)		2,965 (0.3%)	26,171 (2.0%)	142,76 (9.3%)	57,230 (1.9%)		29,240 (0.8%)	9,170 (0.2%)		25,000 (0.5%)	
前年度 未納金					14,900 (1.8%)													
前年度 繰越金	8,315 (3.7%)	45,202 (11.7%)	92,540 (20.4%)	54,295 (11.7%)		38,770 (4.9%)	28,580 (3.6%)	50,000 (5.2%)	46,123 (4.7%)	32,145 (2.4%)	55,010 (3.6%)	108,360 (3.6%)	302,825 (8.6%)	172,150 (4.3%)	12,690 (0.3%)			
不明金			0,300 (0.1%)	0,450 (0.1%)														
計	228,625	387,729	453,120	464,840	809,025	796,005	796,581	965,000	965,638	1,315,086	1,526,780	3,040,660	3,010,000	3,534,495	4,030,040	3,956,090	5,235,000	

つまらないから、遠足と共に旗奪の様な事を、各級通じて行ったら面白からふ<sup>13)</sup>ということから擬戦が始まったとされる。実際に第1回の擬戦が行われたのは、明治25(1892)年11月である。この第1回目の擬戦は、敵味方に分かれ、大将の被った帽子を奪い合うという様な形式であった。その後、それぞれの陣地に旗を立て、藁を丸めてその上に紙を糊付けした球を投げ、これに当たった者は討ち死にとし、敵方の旗を奪うか、全員を戦死させると勝ちという形式に変わった。しかし、球を当てても何も跡が残らず、もめ事が多かったので、当てた跡を残るように磨き粉を白布で包んだ球を用いる様になり、この形式がその後も受け継がれていく事となった。明治30年代に入ると、敵味方をそれぞれ東軍、西軍と名付け、当日の集合場所も別々で擬戦会場まで隊列を組んで行進し、軍隊の訓練さながらに行われ、その活動内容も激しいものであったらしい。「畑あらしの事件より、擬戦と云えば先づ其土地を選ぶに苦む<sup>14)</sup>」<sup>14)</sup>というように、近くの畑を荒らしてしまうほど生徒達は熱中した。擬戦は、毎年1～2回行われる行事として定着し、軍事色の強い時代背景に反映され生徒主体の行事として発展していったが、昭和

に入ると徐々に衰退していった。また最初は遊戯係や遊戯部の行事であったが、陸上運動部設立後は、同部の行事となったと思われる。

### 3) 運動会

高師附中では明治30(1897)年10月に遊戯係の行事として附属小学校と合同の運動会が初めて行われた。小中が分離して行われるようになったのは明治33年からである。明治36年には桐陰会主催の行事となり(この年の会を第1回とした)、漸次規模は大きくなり、校内行事の代表的存在となった。若干の例外を除き、明治30年以後、毎年恒例行事として行われた。大正12年に陸上運動部が分割され、陸上競技部が設立されてからは同部の主催の行事となったが、種々の伝統は継承された。開催時期は主に秋であり、全て休日に開催され、前日の午後の課業は準備のため割かれた。1、2年級は会場清掃、3、4、5年級は入場門、賞品受興所、役員等に分かれ準備を行った。行われた種目は、大きく余興種目と競技種目に分類することができる。余興種目は一般生徒が主に参加し「マスゲーム」「集団体操」等の集団運動やレクリエーション的競技が行われ、競技種目は主に陸上競技種目が行われた。陸上競技部が設立された

表3 桐陰会年間支出の内訳(明治30年から昭和13年)

	明治30年度	明治31年度	明治32年度	明治33年度	明治34年度	明治35年度	明治36年度
雑誌印行諸費	112,333(61.2)	169,735(57.5)					
遠足及び集会費(擬戦を含む)	65,730(35.8)	83,160(28.2)					
雑費	2,560(1.4)						
会計係費	2,300(1.3)						
遊戯具費	0,500(0.3)						
遊戯具費, 運動会寄付		40,634(13.8)					
業書他雑費		1,570(0.5)					
雑誌係			251,471(63.0)	276,767(59.9)	340,590(44.2)	306,229(40.0)	294,555(39.6)
庶務係			82,330(20.6)	52,435(11.3)	72,710(9.4)	96,715(12.7)	59,210(8.0)
遊戯係			603,019(15.8)	47,372(10.3)	48,860(6.3)	63,395(8.3)	45,000(6.0)
臨時支出			2,000(0.5)	1,850(0.4)	24,550(3.2)	71,445(9.3)	
不明金			0,005(0.1)				
端艇部				65,814(14.2)	159,415(20.7)	87,055(11.4)	110,000(14.8)
野球部				18,000(3.9)	124,580(16.2)	140,130(18.3)	120,340(16.2)
庭球部							70,000(9.4)
柔道部							45,000(6.0)
学芸部							
共同予備費							
柔剣道部							
水泳部							
陸上運動部							
記念会							
山岳部							
剣道部							
蹴球部							
陸上競技部							
籠球部							
メダル							
弓道部							
	大正4年度	大正5年度	大正6年度	大正7年度	大正9年度	大正11年度	大正12年度
雑誌印行諸費							
遠足及び集会費(擬戦を含む)							
雑費							
会計係費							
遊戯具費							
遊戯具費, 運動会寄付							
業書他雑費							
雑誌係							
庶務係	247,080(16.0)	277,200(18.2)	270,200(16.3)	367,560(19.4)	577,840(19.9)	647,200(21.5)	746,600(26.9)
遊戯係							
臨時支出							
不明金			0,420(0.1)				
端艇部	180,860(11.7)	207,340(13.6)	211,095(12.6)	206,150(11.0)	365,510(12.6)	376,350(12.5)	196,690(7.1)
野球部							
庭球部							
柔道部						125,230(4.2)	
学芸部	445,310(28.9)	457,120(30.1)	509,745(30.8)	636,970(33.6)	842,190(29.0)	921,220(30.6)	919,000(33.0)
共同予備費	66,890(4.4)						
柔剣道部	224,160(14.5)	170,610(11.2)	224,315(13.6)	188,110(9.3)	320,620(11.0)		157,610(5.6)
水泳部	49,340(3.2)	24,800(1.6)	25,475(1.5)	19,650(1.0)	28,035(1.0)	47,980(1.6)	55,400(2.0)
陸上運動部	326,680(21.3)	384,005(25.3)	406,890(24.6)	458,385(24.2)	721,720(24.8)	703,770(23.4)	665,200(23.9)
記念会							
山岳部			5,615(0.3)	18,160(0.9)	50,700(1.7)	73,240(2.4)	40,700(1.5)
剣道部						116,010(3.8)	
蹴球部							
陸上競技部							
籠球部							
メダル							
弓道部							



大正12年以降、同部は運動会を学習院、帝大等との重要な対抗戦のための練習試合を兼ねて同部の主要な行事に掲げ、競技種目において好記録を求めるようになった。明治39年までは、会の雰囲気盛り上げるため、「フットボール」で始める事を常とした。また明治39年からは、午後の最終種目に「各級対抗リレー」が行われ、選手、応援などの意気込みはもの凄く、盛り上がりは最高潮に達した。明治31年の運動会から、400ヤード競走は一般の部と選手の部とに分けて行われたが、その後、陸上競技種目を一般と選手に分けて競技する方式が定着した。明治期に行われていた競技種目としては、主に400、600、800、1000ヤード競走という比較的距離の長い短距離走と中距離走であった。

大正期に入ると、バスケットボールやバレーボールのような新しいスポーツが紹介され、陸上競技でも走り幅跳び、走り高跳び等の跳躍種目や、砲丸投げ、円盤投げ等の投擲種目が行われるようになり、また100、200ヤード競走も毎回行わ

れるようになった。大正後期には、ほぼ現在でも行われている陸上競技種目のみ行われるようになった。(表4)余興種目で頻繁に行われた種目は、「障害物競走」「綱引」「抽籤競走(物運び競走)」「計算競走」「騎馬戦(擬馬戦)」「二人三脚」「武装競走」「野仕合」等であった。特に現在の一般的な運動会でも馴染みの種目である「障害物競走」「綱引」は、高師附中でも明治30年代からはほぼ毎年行われた種目であり、この両種目は明治期の頃からかなり人気を博していた事が窺える。また、これらの余興種目、競技種目は偏りのないように配置され、合わせて25~35種目程度行われた。また、運動会とは別に運動小会という行事も行われていた。運動小会とは、その名の通り運動会の縮小として行われた会である。第1回運動小会は大正5年の秋に行われたが、翌年の第2回からは、優秀な選手のみが参加する、記録会的性格を持つ会となった。このように運動会は当初、「フットボール」を含む様々な運動(遊戯)を包括する場や機会であったが、次第に陸上競技

表4 運動会種目の変遷(校友会主催第2回, 桐陰会主催第1, 17, 21, 36回)

	M.30.10	M.36.10.15 第1回	M.41.11.1 第6回	T.9.5.30 第17回	T.14.10 第21回	S.15.9.26 第36回
リレー			各級選手対抗	各級選手対抗, 甲乙対級, 200m*4, 対部	200m*4, 対部, 卒業生対在校生	200m*4, 2600m, 対部, 卒業生対在校生, 職員対1年生
附中生外リレー			卒業生	職員		区内小学生
陸上競走	200m, 400m, 800m	300m, 400m, 選手400m, 600m, 選手600m, 800m, 1000m, 1200m	50m, 300m, 400m, 500m, 600m, 1000m, 1200m	100m, 200m, 400m, 800m, 1500m, ハードル	70m, 100m, 200m, 400m, 800m, 1500m	60m, 100m, 選手100m, 対文理大100m, 400m, 選手400m, 1500m, 選手1500m, 学習院間往復マラソン
種目	職員競走(600), 卒業生徒競走	本校生徒競走(600), 附属小学生徒競走(100, 200)	本校生徒競走(600), 附属小学生徒競走	職員競走, 附属小学生徒競走	附属小学生徒競走(200)	
跳躍, 投擲				走幅跳, 三段跳, 走高跳, 棒高跳, 砲丸投, 円盤投	走幅跳, 三段跳, 走高跳, 棒高跳, 砲丸投, 円盤投, 槍投	走幅跳, 選手走幅跳, 走高跳, 選手走高跳, 選手槍投
附中生外跳躍投擲						文理大棒高跳
余興競走	計算, スプーン, 戴翼, 竿拾, 提灯, 支度, 棍棒立, 障害物, 八幡不知, 旗取, 蛙飛	計算, 戴翼スプーン, 抽籤, 擬馬, 障害物, 旗取, 武装, 蛙飛, 二人三脚, 三人四脚, 団体(5人), 単脚	計算, 戴翼スプーン, 俵運び, 棍棒拾, 障害物, 旗取, 蛙飛, サック, トンネルボール, 二人三脚	計算, 抽籤, 障害物, トンネルボール	計算, 英語綴り, 抽籤, 障害物, 武装, 二人三脚	武装障害物, 三人四脚
余興種目	球板, 綱引, フットボール	フットボール, 野仕合, 綱引, 角力	騎馬戦, 野仕合, 綱引, 角力	騎馬戦, バスケットボール, バレーボール, 綱引, 職員卒業生対5年綱引		騎馬戦, 棒倒し, 綱引
体操	普通体操		アレイ体操, 棍棒体操, 兵式体操	兵式体操		機械体操, 大日本青年体操, 兵式教練
総種目数	20	28	29	30	25	30

中心の行事に変化し、陸上競技部の母体となったのであった。

## 5. 各種課外スポーツの組織化

### 1) 陸上競技部

陸上競技は明治30(1897)年の桐陰会設立時の「遊戯係」、明治36年の桐陰会改正によって変化した「遊戯部」によって統括された運動会に既に包括されていた。明治41年、遊戯部、野球部が合併し陸上運動部が設けられ、主に野球、運動会、徒競走招待レース<sup>15)</sup>、擬戦、遠足、旅行等の活動・行事を行った。設立当時の招待レースは、一高・東京帝大・早大が主であった。大正8年からは年2回(春秋)全国中等学校対抗競技会(インターミドル)が行われ、高師附中では牧野、伊藤らが活躍し、彼らの活躍で第1～4回大会では毎回総合3位に入るという好成績であった。その後、大正12年に陸上運動部から陸上競技部は独立し、コーチとして母校に訪れていた木村正彦の提案がきっかけとなり、その年の5月に初の複数種目の総合得点で競う対抗戦、学習院戦が、東京帝大グラウンドで行われた。種目、採点法は前年から始められた早慶戦になら<sup>16)</sup>、熱戦のすえ高師附中が勝利した。やがて学習院戦は、陸上競技部の最重要行事に位置付けられるようになった。また、学習院戦開始以前は、対外試合は他学校運動会に於ける招待レースが主体であったが、学習院戦開始以後の対外試合は対抗戦(学習院、一高、文理大等)が多く行われるようになっていった。これは、陸上競技部の、短距離種目のみの招待レース用の選手育成から、跳躍、投擲、中距離種目等も加えた総合的な選手育成への方向転換とも言える。しかし、陸上競技部は独自のグラウンドを所有していなかったため、練習グラウンド確保にかなり苦心していた様子が桐陰会雑誌から窺える。

### 2) 端艇部

日本で最初期の漕艇のクラブである東京大学の走舸組が東京大学予備門のお雇い外国人、ストレンジ(F. W. Strange)の指導のもとで結成されたのは明治17-18(1884-85)年にかけてのことであった。高師附中の場合、「端艇部」は桐陰会雑誌第101号「ボートの話」(昭和9年)の中で明治27年設立とされている。漕艇の記事が登場するのは桐陰会雑誌第1号の「漕艇に関する規定」(明治30

年)からである。最初の部報は第11号に見られ、「端艇部報：端艇部規則」(明治33年)が掲載された。既に明治30年にボートを保有していることから、高師附中の漕艇の導入は、全国的動向からみても早かったと考えられる<sup>17)</sup>。もし明治27年の設立とすると、学習院の水上部(漕艇部)設立年(明治33年)より早いことになる。

初期の活動形態は専ら隅田川での遠漕であり漕艇草分け時代は競漕よりもむしろ、こういった活動が主流であった。端艇部の主な定期戦は春期端艇競漕会と秋期端艇競漕会の2つであった。これらの呼び名が登場するのは、第15号(明治34年)の部報からである。第41号(明治42年)の部報からは徐々に端艇大会、端艇小会と名称が変わった。定期戦の主な内容は、紅白戦、学年対抗戦などであった。定期戦の実施時期は、毎年春と秋であるが、具体的な日程は、そのときどきの委員会で決定しており、一定ではない。また定期戦のほかにも有志端艇競漕会など、臨時の競漕会があった<sup>18)</sup>。

端艇部は競漕会の開催場所として日本銀行艇庫を使用していた。日本銀行艇庫の名は桐陰会雑誌第11号の端艇競漕(明治33年)に現われ、その名は第45号の端艇部秋期小会(明治44年)の記事から見られなくなる。第53号(大正4年)の端艇競漕会記事で日本銀行艇庫は第一高等学校艇庫と改名されており、以後、昭和10年頃まで第一高等学校艇庫で競漕会が開かれている。それ以降は、尾久文理大艇庫、向島帝大艇庫が使われ、第一高等学校艇庫は使用されていない。端艇部の活動は土曜、日曜、祭日その他の休日に規定され、また季節によってもその活動時間は規定された。しかし、部長の許可があれば臨時に乗艇も可能であり、実際そのような記事も桐陰会雑誌に見られる<sup>19)</sup>。

漕艇には多額の費用がかかった。端艇部は生徒保護者、職員、特別会員からの寄付金にその運営を頼る部分が大きく、中でも生徒保護者からの寄付金は、明治30年の端艇部寄付金では全体の94.1%(総額185.5円の内174.5円)、明治32年から明治33年の端艇新調費寄付金・端艇調整基金寄付金では全体の66.3%(総額543.5円の内360円)、明治34年の端艇部艇庫新築費寄付金では全体の75.5%(総額441.5円の内333.5円)と大きな割合を占めていた<sup>20)</sup>。

最初の開成中学との対校レースは『創立百年史』で大正9年とされている。桐陰会雑誌で対開

成レースに関する記述が登場するのは第87号(昭和2年)からである。昭和15年までの戦績は高師附中の2勝11敗であった。大正9, 10, 11年, 昭和2, 3, 5, 6, 9年と8連敗を喫し, 初めて昭和11年に勝利したが, 続く12, 13, 14年と連敗し, 15年に2度目の勝利を達成した。戦前は開成中に苦戦していた。

### 3) 野球部

東京大学の前身である開成学校の米人教師ウィルソン(H. Wilson)が明治5(1872)年に野球を生徒に教えたのが日本における野球の嚆矢である。明治18年に, 体操伝習所の教師, 坪井玄道が『戸外遊戯法』の中の「ベースボールー打球の一種」で競技法を紹介した。

第一高等学校では明治23年頃から校友会が組織され始めて当時の野球をリードし始め, 中等学校に野球が普及し始めたのは明治時代後半の20年間だといわれる<sup>21)</sup>。高師附中で野球が行われはじめたのは明治28年頃と思われるから, 比較的早期に野球を導入したといえよう。当時の高師附中で行われていた野球は, 現在の野球とは大きく異なり, 校庭で行われる「球技」程度のものであった。例えば, 1) ストライク, ボールの判定はない, 2) 打者は自分の好む球のみを打ち, 打たないときはカウントされない, 3) 野手の守備位置も決まっておらず, 塁間に一人ないし二人が立つのみというものであった。明治29年に, ようやくストライクとボールを区別し, 野手の守備位置も正しく配置されるというように野球の体裁が整えられた<sup>22)</sup>。技術的には, 当時の校内試合の26対37という結果からも分かるように, 相当低いものであった。このような状況の中で同年, 学習院から試合の申し込みがあった。試合を申し込まれた高師附中では, 当時の技術の低さで試合を行うかどうか議論されたが, 結局試合を行うこととなり, 28点差という大差で惨敗した。野球における最初の対校試合<sup>23)</sup>であり, 最初の学習院戦である。

その後, 野球は高師附中で行われていた運動(スポーツ)の中で, 最も盛んに行われる種目となり「運動といえば野球と解され」<sup>24)</sup>というほどになった。明治29年から明治31年までの各年毎の対外試合数をみても明治29年(計2試合), 明治30年(計7試合), 明治31年(計8試合), というように, 年々試合数が多くなっている。

こうして明治33年, 桐陰会の正式な部として

「野球部」が新設された。「野球部細則」<sup>25)</sup>によると, 各級から委員が選出され当該年級の事務を担当したが, 特に5年級の委員が野球部全体の野球器具の管理を担当する統括的存在であったことがわかる。設立当初の部員数は定かではないが, 体制としては, 各学年毎に第1選手, 第2選手が選別(年によっては, さらに第3・第4選手に選別)され, 紅白試合・各組対抗試合を盛んに行っていた。また, 明治38年には選手だけで少なくとも108名の部員がいた<sup>26)</sup>とされ, 全野球部員をA, B, C組に分け, さらに各組を第1選手から第4選手にまで選抜するなど, 部員をかなり細かく分類していたことがわかる。また, 主将は毎年4月初旬に, 野球部全員の投票により選出された。

対外試合では, 主に学習院, 開成中学, 一高と定期的に試合を行っていた。なかでも学習院との定期戦は, 試合が近づくと卒業生(主に高等師範学校の学生)が連日指導に駆けつけ, 猛練習を行うなど, その年の野球部最大のイベントであり, また「学習院戦勝利」が, 当時の野球部の最大の目標であった。しかし, 昭和8年から全国中等学校野球大会(現: 全国高等学校野球大会)東京予選に出場するようになってからは, 野球部としての第一目標は, 全国大会出場となり, 対学習院戦に勝利することは第二の目標へと変化した。この当時の高師附中野球部は, 同大会東京予選初出場でいきなり準決勝に進出した結果からも, その技術レベルはかなり高いものであったと思われる。

野球部の実力アップを目的とした春季野球小会, 秋季野球大会等の数多くの校内試合が行われていた。春季野球小会は, 毎年2~3日間, 秋季野球大会は3~4日間の日程で行われ, 連日, 各級対抗試合や対卒業生試合を中心に1~3試合が行われていた。対外・校内試合とも, 大きな大会や試合の後には「右尚館」という高師附中の施設で, 選手, OBを交えて懇談会を開き, 野球部の結束力を深めた。野球部の練習は, 「春季練習(毎年, 学年末試験終了後, 15日間)」, 「夏季練習(毎年, 8月中旬から約15日間)」が行われ, 通常は1週間に3日間(月~金に1日おきに実施), 約1時間程度練習を行っていた<sup>27)</sup>。日常の練習や校内試合は高師附中の校庭で行っていたが, 学習院戦はほとんど学習院グラウンドで行われていた。また「附属は例年グラウンドに難渋した」<sup>28)</sup>と

の記述から、高師附中の校庭は野球場としては十分でなかったと考えられる。昭和13年には野球専用の球場を建設したが、この球場は翌年、体育館建設のための用地となってしまった。

このように高師附中野球部(桐陰会野球部)は、全国の各学校への野球の伝播が盛んになる時期と時を同じくしてその活動を開始し、他校と比べ施設面では恵まれていなかったにもかかわらず、組織的な体制づくり、豊富な校内試合によるレベルアップなどにより、当時の中等学校球界においてかなりの強さを誇った野球部であった。また「まず野球は勝たねばならぬ。… 勝つためには必勝の信念をもって練習せねばならぬ。ここに不屈不当の精神が涵養される。そうして練習の尊さ有り難さが生まれてくる」<sup>29)</sup>という言葉からもわかるように、勝利という目標を達成するために練習し、自らを鍛え、人間的成長を図ることに野球部の精神的基調がおかれており、このような姿勢からも同野球部の強さの一端を窺い知ることが出来る。

#### 4) 柔剣道部

高師附中では、正課体育の随意科として「柔道部」と「剣道部」が存在していた。柔剣道部としてそれらの活動が桐陰会に位置づけられたのは明治35(1902)年10月のことであった。一般的に剣道、撃剣、柔道、柔術等を名称とした運動部が全国の中学校に設立されたが、柔剣道という名称の部はあまりみられない。武道を総称する部の名称としては、武術(芸)部という名称が一般的であった。明治30年代の桐陰会雑誌には、柔道部の記事しかみられず、剣道部の記事がみられ始めるのは明治34年代からである。また柔剣道部としての活動が何時まで続いたのかははっきりしないが、遅くとも昭和元年以降は柔剣道部としてではなく、柔道部と剣道部に分離したように思われる。

明治30年の桐陰会雑誌第1号に「我校に柔道部の設けありてより已に数年・・・」<sup>30)</sup>とあることから、柔道部の設立は明治20年代後半であったと思われる。随意科としての柔道部のこのように早い設立は、明治27年高師校長に着任した講道館柔道の創始者嘉納治五郎の影響があったように思われる。当時の道場は右尚館で、部内の紅白試合が行われていた。また、幼年、青年別に級が設けられており、紅白試合の後などに進級が発表されていた。30日に及ぶ寒稽古がはじまったのは、明治31

年からであり、その時の皆勤者は35名であった。帯の色で級を分ける制度が設けられたのもこの時であった<sup>31)</sup>。

明治30年から数年間は、まだ明確な形をとった対抗戦は行われていないが、第一高等学校、学習院等の試合に選手が派遣されるなど、各校との交流試合は年々盛んになった。しかし、この対校試合は純粋な対校試合ではなかった。明治32年には初めて学習院との対戦がみられるが、高師附中・講道館連合対学習院という形の試合であった。明治36年になって、初めて他者を混えない高師附中対学習院の試合が実現した。この頃の師範は本田存で、明治35年の寒稽古の際には、本田の提案で青年、幼年の1級以上の階級を設け、特業と名付け、黒帯をもって印とすることが定められた<sup>32)</sup>。桐陰会柔剣道部としての設立は明治35年10月であった。その設立の趣旨は「本校随意科柔剣道部を助け本会員の心を修め軀を鍛り、慎重莊嚴の情を涵養し、進ては校風の発揚の一助に資する」<sup>33)</sup>ためとされている。同年11月には第1回桐陰会柔剣道部大会が2日にわたって開催された。同大会には学習院等他校の選手も来賓として招かれた。この大会は以後も続き、紅白勝負、三本勝負、講道館投の形、有段者勝負などが行われ、嘉納校長が出席することもあった。

明治43年、学校が大塚に移転するに伴い道場も移転した。この頃の師範は本田であり、後には、伊藤、狩野、村上などが指導にあたった。また、明治末から部員数も増え始めた。学習院戦は大正期に入って中止することもあったが、ほぼ毎年続けられ、柔道部の最大の関心事であった。その中止の折りには開成中学、高千穂商業と公式の試合をおこなうこともあった。大正12年に道場が焼失し、練習の場所に困ったこともあったが、大正14年には新しく道場が立て直された。この頃には、高師主催全国中等学校柔道大会や、一高、早稲田、慶應、帝大等の柔道大会へ選手を派遣していた。昭和11年には、剣道部、弓道部とともに校内第1回武道大会を開催し、昭和13年以後は高師主催柔道講習会にも参加するようになった。また昭和14年頃には東京尋常科、青山師範との試合も定期化をみた。寒稽古の他に、夏稽古、暑中稽古、大会、小会などが重視された。

剣道部がいつから活動していたかは必ずしも明らかではないが、明治30年代にはすでに剣道をし

ていた者がいるとされている。なかでも、明治37年に卒業した井上玄一(13回)は、剣道部の草創期に重要な役割を果たしたとされている。明治30年の師範は神影流の下妻であった。ついで明治40年代に入ると部員の数も幾らか増え、明治43年大塚窪町への移転に伴って本格的な道場もでき、次第に部の形を整えた。しかし、その頃は柔道部が優勢であり、入学した生徒の殆ど全員が柔道部に入り、剣道部を選択する者は、1学年せいぜい2、3名であった。先生は星名誠であった。大正期に入ると、明治45年に柔剣道が正課となったこともあり、部員も急速に増え、実力を備えてきたので、柔道部や野球部に伍して対校試合をしたいという気運が高まった。丁度その頃、高師に剣道専修科が創設され、道場が高師と共通となり、高野佐三郎をはじめ多くの優れた先生から指導を受けるようになったことも剣道部の成長に大きく寄与した。しかし、なかなか柔道部とは対等には扱ってもらえることはなかった。柔剣道部という単一の部であって、対学習院戦も柔道部が独占していて剣道部が単独で対校試合をすることは許されなかった。そこで、高師附中で剣道大会を開催して都下の多くの学校から選手を迎え、この来賓群を紅組とし、自らが白組となって紅白試合を行ったりした。また、おそらく先生の流派の関係で、明治末には一時期、一高等以外には選手を派遣しないこともあった。その後、高師、青山師範、豊島師範、一高に選手を派遣したが、上記の理由などで対校試合が始まったのは比較的遅かった。学習院と初めて対校試合を行ったのは大正8年であり、剣道部として学習院戦に参加したのは、大正10年であった。その後一時低迷したが、富永堅吾、佐藤卯吉、三橋秀三などの先生の指導や先輩達の協力を得て実力を蓄え、剣道部は昭和初期の全盛時代へと入った。そのハイライトは昭和10年9月高師主催の全国中等学校剣道大会に優勝したことである。昭和9年頃からは高師剣道部主催の夏季講習会へも参加するようになり、昭和11年には大阪への遠征も行った。通常の練習に加えて、30日にも及ぶ寒稽古、夏稽古、大会、小会等が行われた。

以上のように柔道部、剣道部の活動は活発に続けられたが、昭和16年桐陰会の桐陰報国会への改組に伴い、柔道部は柔道班に、剣道部は剣道班にそれぞれ改められた。このような柔剣道部の活発

な活動の背景には、柔道、剣道が明治末に正課となったことや、高師の強い影響があったと考えられる。

### 5) 庭球部

「ローンテニス」は、一説によれば、明治11(1878)年に体操伝習所教師としてアメリカから招聘されたリーランド(G. A. Leland)によって導入された。明治16-17年には高等師範の前身である東京師範学校で行われており、日本で最初の庭球の対校戦である高等師範学校対高等商業学校(高商)戦は明治31年に創始された。明治35年には高師主催の連合テニス大会が開かれ、高商や帝大も参加した。高師附中の庭球部はこうした背景のもとに、明治36年5月に設立され、発会式が6月に行われた。庭球は高師が強く、高商、慶應義塾、早稲田大学と並ぶ東都庭球界の名門であったため<sup>30)</sup>、高師附中の生徒がそれを目にする機会も多かった。高師附中では庭球は部となる以前から生徒間で盛んであった。庭球をするために生徒たちが互いに資金を出し合い、用具を買ったりしていた。生徒の保証人からそれに対して苦情が出たことから、桐陰会のある委員が庭球部の設置を、奨励ではなくて「監督」の故に提案した<sup>31)</sup>。しかし、早くも明治37年4月、桐陰会で庭球部廃止案が提出された。廃止の理由は、①庭球部は設立の場合の条件を無視するものである、②学生が行う運動としては団体的ではなく、しかも会員にとって経済上、精神上良くないものである、③庭球部は多額の予算を使うほど他の諸遊技と対比してみても優れる点がない、④したがって我が桐陰会に庭球部は不要である<sup>32)</sup>、というものであった。また、この頃テニスそのものは害のあるスポーツではないが、テニスのやり方が悪いと貴公子流の嫌うべき風潮に染まってしまう、体育や人格形成の上に悪影響があるという論説も桐陰会雑誌に掲載された<sup>33)</sup>。こうした中で桐陰会は調査委員会を発足させた。明治37年5月の桐陰会委員会で廃止案は庭球部に改良を求めるということで否決された。しかし、翌38年の第2学期はじめに再び庭球部廃止の声が高まった。批判は、庭球部の改良の実があがらない責任を委員がとり、代わって新委員が再び改良を図るのか、改良の実があがっていないのだから廃部するのかを迫った。9月、桐陰会委員会で満場一致により庭球部は廃止されることとなった。これを受けて、庭球部は11月1日に

庭球部閉会式を行った。庭球部はわずか2年数カ月の短命に終わった。

庭球部は紅白試合や対高商本科戦、対開成中学戦を組織したり、高師主催の連合テニス大会に参加した。庭球部が創立される以前の明治35年11月9日、学習院の選手12名と試合をし、負けている。部が創立された年の明治36年11月にも学習院と試合をし、この時は勝利した。庭球部は短命に終わったため試合数も少なく言及も少ない。

庭球部の予算は明治37年には100円50銭であった。これは端艇部、野球部に次ぐ予算であった。その内訳はボール50ダース購買費(60円50銭)、ネット一張り購買費(1円75銭)、ラケット・コート修理費(9円25銭)、大会及対校マッチ費(10円)、コート新設費(13円)、その他(6円)となっている<sup>39)</sup>。

庭球部の閉会式に部長は「…嗚呼庭球部の桐陰会に於ける生涯は極めて短かりき然も決して短きものあらざりしなり外に向かつては名譽を博し内にあるは相利相樂みき部員諸子よ庭球部はここに廢せられたりと雖ども我が部の精神は固く心に持して決して庭球部の終りを犬死ならしむる勿れ<sup>40)</sup>と述べた。庭球部員にとっても部の廢止はやりきれないものであったにちがいない。なぜなら、明治37年頃から東京府下の学校において庭球が盛んに行われていくようになったからである。高師附中は時代と逆行するような形をとってしまったと考えられる。

## 6) 水泳部

高師の校長であった嘉納治五郎は、海国日本国民には水泳訓練が絶対に不可欠と考え、先ず、嘉納塾である造士会の塾生のために水泳場開設を考えた<sup>41)</sup>。明治30(1897)年に神奈川県三浦郡松輪に造士会の水泳場が開設され、続いて明治33年には神奈川県三浦郡宮田に造士会の第二水泳場が開設された<sup>42)</sup>。嘉納は、柔道の愛弟子であり、高師の柔道の師範であった本田存が、水泳の心得があると聞き及んで、造士会水泳場の水泳指導を本田に委嘱することとした。このようにして本田は、少年時代から太田師範より授かった水府流太田派の游泳術の真髓を、造士会水泳場に参加する少年達に教えることになった。

一方、高師では明治35年に游泳部が設立された。当初、神伝流の上田盛彌を師範に迎え、明治36年、千葉県の北条に水泳場を設置した。また明

治37年からは中野次郎が「高師游法」(神伝流、水府流、小堀流、観海流を取り入れた泳法)の教程を創始し、次いで水府流太田派の本田存が高師泳法を体系化した。こうした中で高師附中は、明治36年、桐陰会に水泳部を設置することを決議し<sup>43)</sup>、翌年「水泳部規則」「水泳部の歌」の制定と共に、桐陰会水泳部の水泳地として千葉県房州の「富浦」を選んだ<sup>44)</sup>。本来ならば高師附中の水泳部は、北条の高師の水泳部に併設すればよいのだが、本田は造士会の松輪や宮田水泳場の経験から、北条とは別に、水泳指導の場として桐陰会水泳部を富浦に開設することにした<sup>45)</sup>。初年(1904年)から、百数十名の桐陰会部員が参加し、ここに桐陰会水泳部が発足した。高師の水泳は広く各流派の長所を総合した日本游泳法を研鑽することになったが<sup>46)</sup>、本田は高師附中で水府流太田派の游泳を基本とする指導を重視した。

桐陰会水泳部は千葉県の富浦で、毎年夏期3週間(7.21~8.10)にわたり、実施された。また附属施設としては、水泳部創設10周年を迎え、大正2年に建設された生徒宿舍(150名収容)、卒業生宿舍(50名収容)があり、和舟4隻、飛び込み台1脚、ターニング台2台などの海上用具が具備されていた<sup>47)</sup>。

水泳指導では、本田存指導監督の下で、高師附中卒業生が監督助手を務めた。特に、本田は助手として高師附中卒業生のみを任命し、桐陰会部員のみによる指導体制を確立した。大正8年からは1年級全員に対し、正課として富浦の水泳合宿に参加させる事になり、その指導陣の母体として、大正12年に「桐游俱樂部」が結成された<sup>48)</sup>。本田存を師範とする指導体制は、昭和24年本田が他界するまで続けられた。

指導内容においては、当初から『日本游泳術』(高橋雄治著、明治33年発行)記載の游泳種目の殆どが指導された。例えば、諸游泳(横体泳法、平体泳法、立体泳法、応用諸泳法)、諸跳込法、種々の競泳などが実施された<sup>49)</sup>。また、初日に試験を実施し、試験の成績により各級に編入され、指導を受けるが、後で進級教目に基づいて進級する事も可能であった。一方、本田の游泳指導は、徹底した実践と口伝であり、教書の類は全く用いられなかった。特に「心水一如」の心境が強調され、泳者としての水勢と気象とに対する厳しい精神の涵養は本田の教えの真髓であり、「一に監

督、二に指導」の戒に徹底した<sup>49)</sup>。また、教目を履修し、その上指導監督能力も優秀と認められると、本田より得業者心得の口伝があり、得業証書一卷が授与された。なお本田は、水府流太田派第四代宗家として、得業生の一部の者に免許皆伝を許している。

一方、競泳の面では、昭和9年に東京高等尋常科との対校試合が高師プールで開始され<sup>50)</sup>、昭和15年からは学習院との定期戦も開始された<sup>51)</sup>。桐陰会雑誌から、当時桐陰会水泳部の部員達は、対校試合での勝負にかなり執着している事が窺える<sup>52)</sup>。

## 7) 山岳部

高師附中の桐陰会「山岳部」が正式に部として承認されたのは大正5(1916)年であるが、その前身である「臨時山岳会」が発足したのは明治45年であった。我が国におけるスポーツ登山の黎明期は明治20年代で、日本山岳会の発足(明治38年)を経て登山人口がようやく増加し始めた時期に創設された「臨時山岳会」は、学校山岳団体としては極めて先駆的な存在であり、他校の山岳部設立にも影響を与えた<sup>53)</sup>。高師附中の遠足行事は明治23年から、一泊旅行行事は明治30年から催されていたが、とりわけ明治43年から45年にかけて箱根・甲信方面へ何度か赴いた旅行登山が契機となり、一部生徒の間で著しく登山熱が高まった。明治45年6月、陸上運動部員有志によって山岳部設立案が提出されたが、当時、その案は「余り突飛であつて實際参与員諸先生及生徒一同も山と云ふものが如何なるものか、従つて山岳部と云ふものを設くるの可否設けるには如何なる様になるかも殆ど明かに解らなかつた」<sup>54)</sup>。即ち、正式な部としての承認は見送られたものの、「経費を全く桐陰会の予算に依らないこと」及び「3年生以上に限り入会を認めること」を条件として、とりあえずは「臨時山岳会」という形で同年7月より活動を開始することになった。

臨時山岳会時代(明治45年～大正4年)の年間活動は、山岳旅行、茶話会、展覧会の3行事のみであった。「山岳旅行」は、夏休み中7～8月に10日前後の合宿登山を行う主要行事で、信州上高地方面へ赴いて当時の山岳界で最もポピュラーとされた北アルプス縦走登山を行うことが多かった<sup>55)</sup>。2学期には、主に校内地理・歴史教室で、旅行後の反省・会計報告・山岳部関係者の懇親等の主旨で開かれた部内の「茶話会」、及び、旅行中の動

植物採集・写真・スケッチ・登山用具を部外者に披露することを目的とした「展覧会」が催された。

大正5年5月、臨時山岳会から「山岳部」への正式な昇格が実現する。臨時山岳会設立当初から活動を支援していた地理教諭・大関久五郎が欧州留学(大正2～4年秋)を終えて帰国したのを契機に、卒業生・在校生委員が結集し、山岳部設立の議論が再燃した。この時、中学校山岳部として然るべき明確な活動方針を定めたことこそが、部の正式な成立を学校側に認めさせ得た重要な一因となる。「最も善い方針と云ふのは、現在他の学校の山岳の会で行つてゐる様な峰から峰へ走つて歩くサモアの様に単に高い山を極めるのを無上の愉快な事とするのでは無く。即ち山岳旅行では無くして山岳生活を行ふと云ふのであります」<sup>56)</sup>という困難な山頂を極める所謂「ピーク・ハンター」よりも「山岳生活の実践」を重視する活動理念が確立されたのである。

山岳部が正式に設立された大正5年から昭和初めにかけて、活動行事は次第に多様化した。大正5年に卒業生や日本山岳会メンバー登山家を招待して初めて講演会を催し、時に山岳フィルム上映会や参加者座談会も盛り込み、桐陰会員に対する山岳の普及活動を行った<sup>57)</sup>。大正8年には班別「山岳旅行」を実施した。従来約30名であった参加人数が約80名に急増した結果、初めて旅行を2班に分けて実施した。以後、参加者の人数や登山経験に応じて全体を2～4班に分け、班毎に旅行先や日程を設定する形態を採用することになった<sup>58)</sup>。大正9年には山岳部主催「遠足」事業が開始された。年に2～3回、東京近郊の行程20～40キロの距離を日帰りて歩く「強行遠足」や「夜行遠足」等、従来は陸上運動部が企画してきた桐陰会の遠足事業を山岳部が主催することになった<sup>59)</sup>。大正10年に春季山岳旅行「春の旅」が始められ、春夏2度の合宿登山が実現した(昭和4年より、夏季山岳旅行は「夏の旅」と改称)。夏の旅は北アルプスで行うことが多かった一方、春の旅では3月末～4月初に3日～1週間程度の日程で、主に箱根・伊豆方面へ赴いた。大正13年には部の年刊誌「旅」が発行された。また、部蔵書の閲覧・借用規定、及び、テントや登山用具等の一般貸出規定も定められた<sup>60)</sup>。「有志スキー合宿」は大正14年に開始され、以後、大正天皇崩御後の昭和2

年を除いて昭和13年まで毎年続けられた。4月に武蔵野方面へ日帰りて赴く「新入生歓迎散策」が昭和3年に、秋季「キャンプ」は昭和4年に定例化した。昭和6年の春の旅では佐渡島で「積雪期登山」を行い、凍死者3名(学生2名、案内人1名)を出す高師附中山岳部唯一の遭難事件となった<sup>61)</sup>。

大正期から昭和初期にかけて「登山の困難性」を追求する山岳界の風潮は、例えば積雪期登山、案内人なしの登山、ヴァリエーション・ルート(登路変更)やロック・クライミング(岩登り)等の登山法を開拓しつつエスカレートし、諸学校山岳部は幾多の遭難者を出すことになる<sup>62)</sup>。そのような中で、山岳部は、大正5年の部設立当初から「ピーク・ハンターの否定」という明確な理念を掲げ、在校生・卒業生・教師陣が協力し合って「山岳キャンプ生活を楽しむ」活動方針を確立してきた。高師附中山岳部の独自性は、この点に見い出せよう。かかる活動方針は、山岳部が桐陰報国会鍛練部「山岳班」あるいは「山岳行軍班」と名を変えた国防訓練色濃厚な戦時下においても、尊重され継承されたようである<sup>63)</sup>。

## 8) 蹴球部

明治30(1897)年来、遊戯係や遊戯部主催の運動会は、常に「フットボール」の試合で始まった。しかし、明治39年を最後にフットボールは運動会から姿を消した。このフットボールは「蹴球」の祖型と考えてよいであろう。

桐陰会における蹴球は、大正6年頃から盛んに行われるようになったが、この時期には陸上運動部に属して活動を行っていた。大正7年には陸上運動部の中に蹴球部が存在していた。高師附中の最初の対外試合は大正9年の第3回関東蹴球大会であった<sup>64)</sup>。大正10年9月に創立された大日本蹴球協会は、第1回全国優勝競技会を開催し<sup>65)</sup>、東部予選を高師が運営した。桐陰会の蹴球部は毎日放課後、先輩やディン(ビルマ人)<sup>66)</sup>、バード(イギリス人)のコーチを受けて練習を積んだが、2回戦で東京蹴球団に0対5で負けた。

大正12年、陸上運動部から蹴球部として独立して積極的に全国大会に参加するようになった。大正12年、第6回の関東蹴球大会では準決勝まで進出した。大正13年9月に高師の主催の第1回全国中等学校ア式蹴球大会が高師及び豊島師範の運動場で開催された。同大会には高師附中を含め約40

校が参加した。東京帝大に在学中の卒業生、小島、竹腰の指導を受けた第2回大会ではみごと優勝をし<sup>67)</sup>、以来第7回大会まで6連勝を遂げ、第9回大会でも優勝した。

大正7年1月大阪毎日新聞社の主催によって開始され、昭和15年まで続いた「日本フットボール大会・ア式部」(大正15年より全国中等学校蹴球大会と改称)でも高師附中の蹴球部の活躍は目覚しかった<sup>68)</sup>。高師附中は昭和2年の第9回大会から参加したが、第10回、第12回、第17回大会の関東予選で優勝して、大阪甲子園での決勝トーナメントに出場した。結果は1回戦または2回戦敗退であったが、サッカーでは全国レベルの屈指の中学校として大正時代中期から昭和初期にかけて君臨しつつあったのであった。

## 9) 籠球部

籠球部は、蹴球部から独立し、創部されるまで蹴球部内籠球として活動していた。運動会において大正6、9、10、11年に籠球が種目として存在していることが記録に残っており、籠球はこの頃から行われていたと推測できる。しかし、蹴球部内における籠球の活動、籠球部の前史時代については、記録が残ってはいない。そのため、「籠球部の神話時代」と呼ばれている。後に、この頃のOBが創部以前の籠球部について次のように述べている。

「立教大学のコートでインターミドルが催された。素より出場が許される筈もなく、オメガというクラブ名で学校には内密で参加したところ、幸か不幸か準決勝まで勝ち進んだため、朝日新聞のスポーツ欄にオメガ(附中)と活字になって出てしまった。当時の附属には、対外試合に選手として出場するには、学校の成績に・稍可・が幾つかあるとその資格がないという規則があつて、遺憾ながらこれに抵触する選手がいたという廉で、対外試合無断出場、無資格選手出場のダブルファウルを犯した件で徹底的に油を絞られた<sup>69)</sup>。」

大正15(1926)年4月、桐陰会委員会において独立の提案が出され、採決をされたが否決されている。しかし、7月、籠球部は桐陰会規則改正と共に蹴球部から独立し、創立された。昭和15年からは桐陰報国会の籠球班として活動することとなる。

籠球部の活動として、毎年、籠球小会なる大会が春と秋に学内で催されていた。籠球小会は1週

間ほど続いて行われ、毎日昼休み、放課後に行われていた。学年対抗戦、クラス対抗戦、部対抗戦、先生対生徒戦などがあった。練習はインターミドル大会を目標として週2回行われていた<sup>70)</sup>。対外試合については、インターミドル大会がその目標であった。この大会の記録は昭和8年度の記録(3回戦)のみが残っている。その他、近隣中等学校籠球大会(昭和4年)、浦和高等学校主催全国中等学校籠球大会(2回戦)(昭和5年)、全日本中等学校籠球大会(昭和6年)、都下中等学校親睦籠球大会、第13回全国中等学校籠球選手権大会(2回戦)(昭和11年)、第15回全日本中等学校籠球選手権大会(準々決勝)(昭和13年)、第8回東京府都下中等学校親睦大会、第16回全日本中等学校籠球選手権大会(準決勝)、明治神宮奉祝籠球大会予選(準決勝)(昭和14年)の記録が残っている。また、高師附中は様々な学校やクラブと練習試合を行っていた<sup>71)</sup>。開成中学と市立二中学とは定期戦が行われていた。

籠球小会は隣保館、右尚館、高師コートなどが使用された。それらのコートは十分なものではなかったため、練習試合などの対外試合は昭和12年までは7割方相手校のコートで行われた。昭和9年に新体育館が建ち、コートが設備されると、昭和13年以後ほとんどの試合が高師附中のコートで行われるようになった。また、高師附中籠球部のOB会は昭和11年に発足した。このOB会は「RTO」と呼ばれる、バスケットボールのチームでもある。このRTOは高師附中籠球部を指導したり、練習試合などをしたり、なにかと後輩のために尽くしている。施設面の充実とOB会の発足によって高師附中籠球部の大会成績が徐々に向上したと考えられる。

## 10) 弓道部

『桐陰』に「弓道部の生い立ち」を書いた部員であった山崎によると、弓道部の創立は昭和5(1930)年9月である。その設立に非常に尽力した文理大教授の田中寛一は同部の生みの親とされる。以後、西牟田、野原、中村などの先生の指導で練習し、また、正課が始まって順調に発達した。寒稽古、夏稽古、大会、小会が開かれ、文理大や生弓会主催の大会へも出場するようになった。けれども設立当初は、放課後の基本的練習が確実に行われなかったため、成績は芳しくなかったとされている。昭和8年2月に弓道部は新たな

段階を迎えた。つまり、西牟田の尽力で学習院出身の清岡繁榮をコーチに迎え、学習院弓道部の組織や練習方法を聞くなど部の改善にのりだした。その結果、わずか1年で中等学校の覇を握っていた学習院(既に大正7年から弓道が「正課」として取り入れられ、弓道が活発に行われていた)を破る程の実力を備えた<sup>72)</sup>。しかし、以前の部員の殆どは皆練習らしい練習をしたことがなかったので、放課後毎日練習をしてもなかなか来ず、1、2年の正課の中から有望な人を見出すなど部員の確保が問題であった<sup>73)</sup>。また、当時は毎年弦代だけでも費用がかかり、赤字を出すより仕方のない予算であったなど、財政的な問題もあった<sup>74)</sup>。昭和8年頃から討論されていたが、正式に弓道部として桐陰会に加入したのは昭和10年2月4日であった<sup>75)</sup>。弓道部としての体裁を整え始めたこの頃の部長は石橋、師範は西牟田の両先生であった。西牟田は当時、本多流の生弓会道場では重鎮に属していた<sup>76)</sup>。弓道部の行事には寒稽古(1月)、春稽古(3~4月)、夏稽古(7月)、暑中稽古(8月)、大会(10月)、小会(6月)などがあり、紅白試合、金的、競射、板割などが行われた。それらの練習には先生や卒業生も参加することもあった。また練習はトタン屋根の天井の控え室もない道場で行われた。

府立一中、青山師範などと試合を行ったが、昭和10年頃には学習院、東京高校尋常科、早稲田実業との試合は定期化をみた。また、生弓会の大会、文理大主催の全国中等学校弓道大会(8月)や明治神宮奉祝弓道大会などにも参加した。しかし、その中心は学習院戦で、練習もそれを目指して行われた。その他、学内では、昭和11年から柔道部、剣道部と合同で、武道校内大会を開催した<sup>77)</sup>。戦時下の昭和16年7月、桐陰会が桐陰報国会に改組されるにともない、弓道部は、鍛錬部の一つの班としての弓道班となった。

## 11) 体操部

体操部はその前身として昭和8(1933)年、体操倶楽部(仮)が設立される。これは同好会的性格のクラブであったと考えられる。この年の運動会で体操倶楽部員として初めて、今北、原、金井、安田、池永ら5人が生徒の前で模範演技をしたという記録が残っている<sup>78)</sup>。また、同年10月には第4回全日本器械体操選手権大会第2部に出場し、新進附属の意気を示した。

昭和12年、桐陰会委員会において体操部新設の議があったようではあるが、ここで可決されたのか否決されたのかは不明である。昭和15年にも体操部が設立されたという指摘もあるが<sup>79)</sup>、予算に関する記録がないため、正式な桐陰会の部となったのか定かではない。しかし翌年の昭和16年7月、桐陰報国会が結成され、その中に体操班が結成された<sup>80)</sup>。

当時、中学校全国大会では跳び箱(現在の跳馬)と鉄棒だけであったが、高師の生徒たちが吊り輪やあん馬、平行棒を練習していたので高師附中の生徒もこれらを練習していたと考えられる。

## 12) 射撃部

射撃部に関する記事が明確に桐陰会雑誌にみられるのは、昭和14(1939)年である。「射撃学習院戦の感想」を書いた武谷によれば、この昭和14年の時点で射撃部は「桐陰会の部として認められていない」<sup>81)</sup>部であった。この年の6月、大森の射撃場で初めて学習院と対戦した。学習院の射撃部は、昭和6年に設立された全国的な強豪であった。その学習院戦に勝利したことは画期的であったが、射撃部は正式の部として認められていなかったため、その試合は「正式の対校試合の形をとれず」<sup>82)</sup>、練習試合としてであった。この時の選手は6名で、試合前には、数名の先輩とともに、毎日大森の射撃場へ行き、暗くなるまで練習したという。同年7月には、全国中等学校射撃大会に参加し、40校中9位の成績であった<sup>83)</sup>。

射撃部は、戦時下の昭和16年7月の桐陰報国会の設立に際して、国防訓練部の射撃班となった<sup>84)</sup>。

## 6. 「院戦」の形成

桐陰会雑誌に記録が残る最古の対学習院戦(院戦)は、明治29(1896)年11月の野球の試合である。この試合は高師附中が自ら望んだものではなく、実力で勝る学習院側からの提案に、議論の末応じたものであった。学習院の野球部は、すでに明治22年に正式に活動を開始していたが<sup>85)</sup>、当時の高師附中は、「未だミットを用ふるを知らず、捕手すら数ヶ月前より漸く用ひしに過ぎざりき」<sup>86)</sup>という状態であった。院戦の開始は、高師附中側よりも、むしろ学習院側の野球熱の興隆によるところが大きかったといえよう。明治29年以降、野球の院戦は、明治31年、34年、35年、39年に記録されている。この時期の野球の院戦は、「昨秋の

恨みいかで報いずにはあるべきと、今秋を期して磨きに磨きし腕前もて…」とあるように、高師附中の選手達にとって「待ちに待ちたる」ものとなった<sup>87)</sup>。しかし明治39年以降、この対戦はしばらくの間断絶し、本格的に定期戦化するのには後の時代のことであった。

明治32年以降、高師附中は学習院の柔道大会に参加していた。しかし、この柔道大会の一部として学習院との紅白試合が行われるようになったのは、明治36年のことであった<sup>88)</sup>。以降39年、41年、42年、44年の対戦記録が桐陰会雑誌に残っている。この試合は学校の名声を賭けた重要な試合となった。敗戦は屈辱であり、断じて許されないものであった。柔道に見られたこの勝利至上主義的傾向は、後に他種目にも伝播していく。明治36年には、学習院から端艇のレースの申し入れがあったものの、学習院側の盟約違反により中止となった<sup>89)</sup>。結局明治期には、院戦が行われていたのは野球と柔道のみであった<sup>90)</sup>。特別な試合としての院戦観の基盤は、野球と主に柔道の試合を通して形成されたと考えられる。

一時断絶していた野球の院戦は、学習院にかわって対戦相手としていた開成中学の野球部廃止を契機として、大正3年に復活した<sup>91)</sup>。また剣道部は、大正6年に学校から対外試合の許可を受け、大正8年には「多年の宿望であった」院戦を決行した<sup>92)</sup>。さらに「対学習院陸上競技会」も大正12年に開始された<sup>93)</sup>。一方柔道は、学習院側の一方的な申し入れにより、大正5年を最後に一時断絶する。このような各部の対外試合熱の高まりと共に、院戦は一大イベントと化した。各部はこの対戦のために入念な準備を怠らなかった。大正5年6月、柔道部は、来る11月の院戦のための練習として、高等師範予科と対戦した。「此一戦已に高師予科を一蹴し去る。对学习院勝負の幸先いかによきかを見よ」<sup>94)</sup>また大正8年6月、初の院戦を11月に控えた剣道部は、剣道小会において各校選抜の相手に大勝した。「我が軍は勝ちぬ。…我等は今日の意気を以って、学習院を屠らざるべからず。」<sup>95)</sup>これらの史料から院戦への意気込みが感じられよう。それだけに、院戦の勝利は「我が重大の任遂げぬ」<sup>96)</sup>という達成感に満ちたものであった。

対照的に「一競技部の敗は学校の敗」という敗北観も同時に形成された。また、院戦を単なる勝

負の場以上のものであるとする見解もみられるようになった。大正9年、柔道部の歴史を回顧したある論説の筆者は、大正5年の院戦中止を評して、「此の勝負が両校をつなぐどれだけ太い絆であったか。それをもう少し学習院の方に理解して頂きたかった」<sup>97)</sup>と述べている。勝利至上主義的傾向と共に、勝負を越えた一大イベントとしての「院戦」という伝統が、新たに創出されたのである。

野球部は毎年学習院との定期戦を続けた。昭和元年には柔道部の院戦が復活した。また記録が不完全であるため詳細は不明であるが、柔道、剣道、陸上の各部も時折中断を挟みながら、院戦を継続していた。昭和9年に弓道部が加わると、院戦は計5部による総合定期戦として認識されるようになった<sup>98)</sup>。そして、昭和14年、この年から始まった射撃部の試合を加え、計6部の対戦すべてに高師附中は勝利した。これは「全勝記念号」として桐陰会雑誌に特集が組まれるほど、偉業として称えられた。この時期の院戦は、もはや一つの部に固有のものではなかった。学校対学校の戦いであるという認識はさらに強くなった。一方、選手達は全国大会等の院戦以外の対外試合にも関心を持つようになった。一部には院戦軽視の傾向が生まれつつあるとの危機意識から、あるOBは、「对学习院試合に関する認識不足に就て」という論説を寄せ、部員の再教育を促している<sup>99)</sup>。これは院戦の伝統を保持、存続させようとするOBの介入であるとみることもできよう。以上のように、総合定期戦としての院戦観が確立したのは、種目数が増加した昭和期以降のことであった。全国大会等の活発化により、一時院戦に対する選手達の関心は動揺したが、OBの介入もあって保持された。そして昭和14年の全勝によって、院戦への関心はピークを迎えたのである。

## 7. 施設状況

高師附中の運動施設は決して恵まれたものではなかった。ここでは高師附中の移転、資料的にわかる敷地の広さの変化を年表形式にして一覧表にしておく。(図2、図3)

旧制附属中学校校地変遷一覧

明治21(1888)年9月：

附属小学校を附属学校と改称し、尋常小学校(4年)、高等小学科(2年)、尋常中学科が

設置される(高等師範学校附属学校尋常中学科を旧制附属中学校の創設とする)。校舎は高等師範学校構内(神田区宮本町の昌平学園所跡)にあった。

明治23(1890)年4月：

校舎は神田一橋通町23番地(元東京高等女学校跡)に移転した。

明治29(1896)年12月：

附属学校小学科から尋常中学科を分離して、附属尋常中学校と改称される。校舎は、小学校と分離し、お茶の水(神田区宮本町)の高等師範学校構内に移転する。

明治32(1899)年3月：

附属尋常中学校は附属中学校に改称される。

明治36(1903)年4月：

東京高等師範学校が大塚に移転したため、同校校舎を全て附属中学校が使用することになる。

明治43(1910)年7月：

東京市小石川区大塚窪町の東京高等師範学校構内の新築校舎に移転する。

明治44(1911)年：

敷地2,172坪、建物524坪(内2階326坪)、生徒数369名。

昭和15(1940)年5月：

創立50周年記念事業の一環として、東京市小石川区大塚町56番地に新校舎を建設し、移転する。敷地6,053坪、建物(建坪：1,005坪、延坪：1,836坪)、生徒数631名。

昭和20(1945)年5月：

校舎は戦災のため焼失する。

## 8. 結論

高師附中における課外体育活動の組織化の機序は、既に指摘した渡辺の結論に大筋合致するものであった。しかし、校友会運動部の形成に先立って、高師附中では正課の延長としての随意科で柔道、剣道が行われた後に運動部として組織されるという道筋を辿った。また、遠足や運動会は校友会の最も重要な課外活動であったが、特に、運動会は後に運動部を形成する多様な種目の温床であった。陸上競技、「フットボール」、大正に入るとバスケットボールやバレーボールが運動会種目として導入された。運動会は多様なスポーツ種

東京高等師範学校附属中学校  
校舎敷地略図

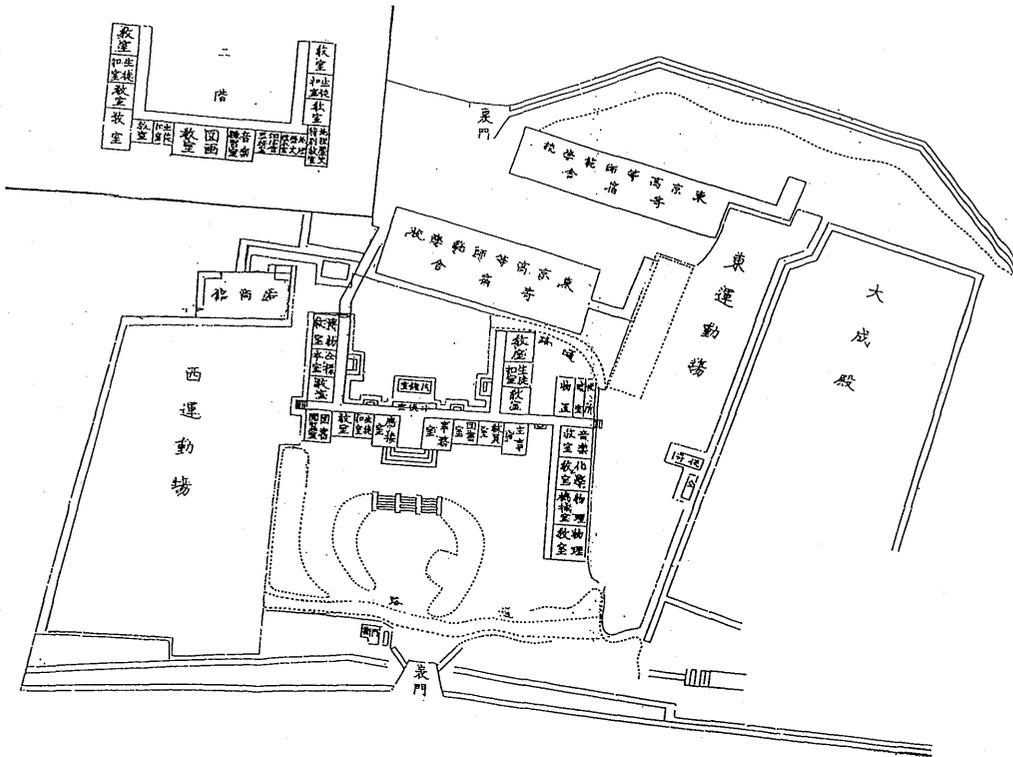


図2 東京高等師範学校附属中学校校舎敷地略図(明治38年)

(出典：東京高等師範学校附属中学校一覽 自明治38年4月至明治39年3月)

目を生徒に紹介する場でもあった。遠足や修学旅行から山岳部も派生した。端艇と野球は、渡辺の指摘どおり、最も重要な課外体育活動としていち早く組織されたが、公立中学校で比較的早期に普及をみたとされる庭球は、高師附中の場合、廃部という結末を迎えた。校友会における運動部の統括組織は、「校友会」の遊戯兼遠足係→遊戯係、遠足係→「桐陰会」の遊戯係→遊戯部→陸上運動部というように数度の改組を経たが、次第に細分化された各種運動部に独立する傾向を持った。それらの設立は、高師附中の場合、端艇部(明治27年または33年)、遊戯係(陸上競技を含む、明治30年5月)、野球部(明治33年)、柔剣道部(明治35年10月)、庭球部(明治37年4月)、水泳部(明治37年)、山岳部(大正5年5月)、蹴球部(大正12年)、籠球部(大正15年7月)、弓道部(昭和10年)、体操部(昭和16年7月)、射撃部(昭和16年7月)という

序列であった。

運動部の形成にあたり、OBの役割は極めて重要であった。分けても一高や東京帝大に進学したOBは積極的にコーチとして各種運動部の部員の指導に当たった。また、高師附中の運動部の練習試合の相手として、一高、高師、高商等の上部校を始めとして、学習院、開成中学、府立一中などのエリート校が選ばれる傾向が見られた。そうした中から、開成中学との漕艇の定期戦や、学習院との各種スポーツの定期戦が組織された。特に学習院との定期戦は、昭和初期までに各種運動部が最も重視する総合定期戦としての「院戦」へと進化し、高師附中の課外体育活動に新たな伝統を形成した。蹴球では大正から昭和にかけて関東で屈指の強豪チームを作り上げ、全国にその存在を知らしめた。高師附中の山岳部もその先駆性において高師附中の語り継ぐべき伝統を築きあげた。ま

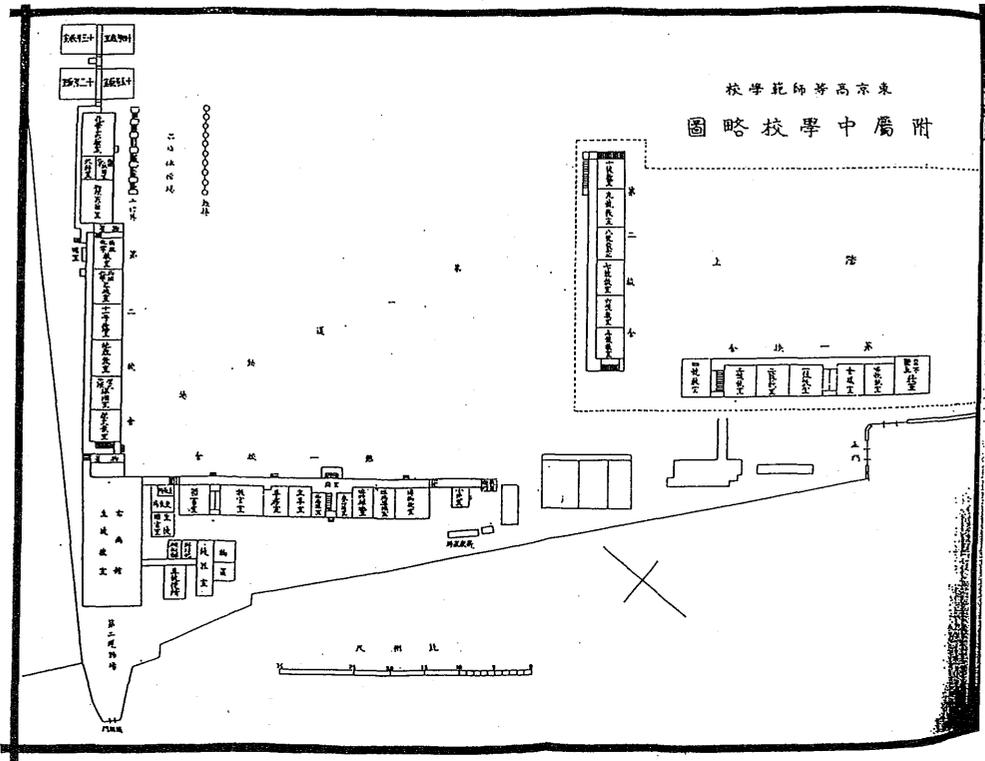


図3 東京高等師範学校附属中学校校舎敷地略図(昭和5年)  
(出典：東京高等師範学校附属中学校一覧 自昭和5年至昭和6年)

た、水泳も高師附中の固有な伝統を形成した。校長の嘉納治五郎に指導を委嘱された水府流太田派の本田存は、OBによる高師附中固有の水泳指導体制を確立した。それは水泳部に止まらず、一年生が身につけねばならない正課となり、高師附中生徒の伝統的な身体技法を確立した。高師附中の課外活動の形成は、新たな活動への積極的な関心とその意欲的な実践を維持しつつける中で、単に遊びの組織化という側面を超えて、明らかに、高師附中のカラー、高師附中の伝統を作り上げるプロセスでもあった。

#### 付記

1. 本研究は共同研究であり、主に阿部が1.2.3.7.8., 寶學が5.4)10)12), 中塚が2., 柳が5.6), 孫が5.8), 秋元が6., 山本が5.7), 後藤が4.5.1), 池原が3.7., 細江が5.3), 田原が5.5)9)11), 美山が5.3)を分担執筆した後、阿部が全体の補正を行った。

2. 本研究の史料蒐集にあたって、元附属中学校校長関岡康雄先生、附属高等学校副校長岩下親夫先生をはじめ筑波大学附属中学校・高等学校の多くの方々に種々の便宜を図って頂いた。記して謝意を表します。

#### 引用文献

- 1) 東京教育大学付属高等学校、附属中学校(1959)：創立七十周年，p.15.
- 2) 旧制中学校の課外活動に関する先行研究として本研究は主に次のものを参照した。
  1. 平野稔：大分県における明治体育史の研究—中学校のスポーツについて，大分大学経済論集，26-4：61-97.
  2. 鶴岡英一(1973)：明治期における広島県中学校の校友会運動部について，体育学研究18-1：9-22,
  3. 木下秀明(1971)：我が国における運動部の成立の変遷，体育の科学，21-11：684-687.
  4. 木下秀明(1975)：課外体育の史的変遷，体育の科学，25-9：605-608.
  5. 渡辺融(1978)：明治期の中学校におけるスポーツ活動，体育学紀要 東京大学教養学部体育研究

- 室, 12:1-22.
6. 小口正行(1980): 明治期の長野県における学校体育 第八報-課外活動をめぐって-, 第30回日本体育学会大会号: 96.
7. 新美正之(1981): 日比谷高校百年史に見る初期の体育関係について, 第31回日本体育学会大会号: 163.
- 3) 前掲書<sup>2)</sup> 渡辺融は「公立中学校校友会の設立は, 学校設立の新旧にかかわらず, 明治25年~同34年に集中している。明治31年には設置率が68.6パーセントに達している」と結論づけている(pp.18-19.)。また, 「近代日本学校体育史」でも「中学校に於けるクラブ活動は, 或意味で自然発生的に発展した。明治一九年の東大運動会(=校友会), 二〇年の東京高商運動会(=校友会), 二二年の学習院輔仁会, 二三年の一高, 東京師範付属中学, 佐賀中学などの校友会, 二四年の五高竜南会, 二五年の慶応体育会などが次々に設立され, クラブ活動は組織化され, 学生生徒のスポーツに対する関心が高まってきた」とされ, 明治23年の高師附中の校友会設立について言及している。(竹之下休蔵, 岸野雄三「近代日本学校体育史」東洋館出版, 1959, 7, p.35.)
- 4) 東京高等師範学校附属中学校一覽 自明治38年4月至明治39年3月, pp.91-96., 自明治42年4月至明治43年3月, pp.88-90.
- 5) 同上書 自昭和3年4月至昭和4年3月, 卒業生状況一覽 (昭和3年5月調べ)
- 6) 桐陰会になると生徒は会員, 教師は参与員, OBを特別会員と呼ぶようになる。(筑波大学附属中学校・高等学校百年史編集委員会(1988): 筑波大学附属中学校・高等学校創立百年史)
- 7) 桐陰会雑誌, 第2号 明治30年2月26日, p.80.
- 8) 木下によれば明治20年代における中等学校の校友会のスポーツ活動は, 課外活動の規定はなかったが, 学校がその教育的な必要を認めて, 全員参加を建前として始まったとしている(木下秀明, 前掲書<sup>2)</sup>, 「運動部」pp.634-637)。また鶴岡も「中学校運動部は学校当局によって準備された」と指摘している。(鶴岡英一, 前掲書<sup>2)</sup>, p.9.)
- 9) 桐陰会雑誌, 第1号 明治31年7月23日, pp.64-65.
- 10) 桐陰会雑誌第1号~第109号(欠号を除く)の年度会計報告より表1, 2を作表した。
- 11) 桐陰会雑誌, 第13号, 明治34年6月16日, p.158.
- 12) 桐陰会雑誌, 第72号, 大正9年6月5日, p.53.
- 13) 同上書 p.55.
- 14) 桐陰会雑誌, 第18号, 明治36年3月17日, p.111.
- 15) 招待レースは, 各学校の主催する運動会の一種目として行われた。
- 16) 第1回対学習院戦で行われた種目は短中距離・リレー・障害・跳躍・投擲であった。
- 17) 従来の研究では, 中等学校で最も早い時期に「漕艇」の導入を行ったのは東京(東京府一)で明治24年頃とされ, ついで25年, 福山(誠之館), 26年鳥取(鳥取一)と続くとされる。後に開成中学, 城北中学(今の府立四中), 府中一中, 附属中学, 日本中学, 学習院でもボートが盛んになった。
- 18) 桐陰会雑誌, 第5号, 明治31年10月26日, pp.84-88.
- 19) 桐陰会雑誌, 第6号, 明治32年3月22日, pp.85-87. のなかには記念会遠足終了後の漕艇(明治32年2月)に関する記述がある。
- 20) 桐陰会雑誌に記された寄付金報告を参照。
- 21) 渡辺融, 前掲書<sup>2)</sup>, p.16.
- 22) 桐陰会雑誌, 第111号(全勝記念号), 昭和14年12月25日, p.132.
- 23) この院戦の前日に尋常師範学校と試合を行っているが, 翌日の試合のための練習試合ということで, 本格的な初の対外試合は学習院戦とする。
- 24) 「桐陰」刊行委員会編(1984): 桐陰, p.20.
- 25) 桐陰会雑誌, 第12号, 明治34年2月26日, pp.112-124.
- 26) 桐陰会雑誌, 第25号, 明治38年7月11日, p.108.
- 27) 桐陰会雑誌, 第29号, 明治29年2月22日, p.10.
- 28) 桐陰会雑誌, 第111号(全勝記念号), 昭和14年12月25日, p.117.
- 29) 同上書, p.110.
- 30) 桐陰会雑誌, 第1号, 明治30年7月23日, p.79.
- 31) 桐陰会雑誌, 第3号, 明治31年2月26日, pp.78-79.
- 32) 桐陰会雑誌, 第13号, 明治34年6月16日, p.155.
- 33) 桐陰会雑誌, 第17号, 明治35年12月20日, p.165.
- 34) 学習院百年史編纂委員会編(1981), 学習院百年史, 第一編前, p.865.
- 35) 「桐陰」刊行委員会編, 前掲書<sup>2)</sup>, p.87.
- 36) 桐陰会雑誌, 第21号, 明治37年3月17日, p.120.
- 37) 筑波大学附属中学校・高等学校百年史編集委員会, 前掲書<sup>6)</sup>, p.120.
- 38) 桐陰会雑誌, 第21号, 明治37年3月17日, p.125.
- 39) 桐陰会雑誌, 第23号, 明治38年1月12日, p.188.
- 40) 桐遊倶楽部(1985): 桐陰会水泳部創立八十周年記念誌, p.27.
- 41) 桐陰会雑誌, 第76号, 大正11年3月15日, p.69.
- 42) 「桐陰」刊行委員会編, 前掲書<sup>2)</sup>, p.29.
- 43) 桐陰会雑誌, 第22号, 明治37年10月6日, pp.171-173.
- 44) 桐遊倶楽部, 前掲書<sup>4)</sup>, p.30.
- 45) 同上書 p.32.
- 46) 「桐陰」刊行委員会編, 前掲書<sup>2)</sup>, pp.101-102.
- 47) 桐遊倶楽部, 前掲書<sup>4)</sup>, p.38.
- 48) 桐陰会雑誌, 第22号, 明治37年10月6日, pp.171-172.
- 49) 「桐陰」刊行委員会編, 前掲書<sup>2)</sup>, p.911.
- 50) 桐陰会雑誌, 第101号, 昭和9年12月20日, p.155.
- 51) 「桐陰」刊行委員会編, 前掲書<sup>2)</sup>, p.211.
- 52) 桐陰会雑誌, 第109号, 昭和13年12月24日, p.111
- 53) 安川茂雄(1969): 近代日本登山史, あかね書房, p.1251によれば, 学校山岳団体のうち最も古いもの

- は第四高等学校旅行部(明治31年)、中学校では京都二中登嶽部(明治39年)である。桐陰会雑誌、第72号(大正6年3月)には、「中学校として殊に学術的な真面目な山の会を設立したといふことは、非常な反響を世間に与へることとなり、一高には其の翌年旅行部の設立を見それから続々として方々の学校に今日の様な山岳会が出来て来ました」と記されており、他校へ与えた影響力は強かったと思われる。
- 54) 桐陰会雑誌、第63号、大正6年3月18日、p.60.(原文のまま)。
- 55) 北アルプス以外では、八ヶ岳、妙高、志賀高原、日光、尾瀬等へ赴くこともあった。
- 56) 桐陰会雑誌、第63号、大正6年3月18日、p.61.(原文のまま)。
- 57) 著名な登山家では木暮理太郎、梅沢親光、田部重治、藤島敏男等が招かれている。
- 58) 大正9年は3班、昭和4年は4班編成の旅行となっている。桐陰会雑誌、第93号(昭和5年12月)、同第104号(昭和11年7月)を参照。
- 59) 桐陰会雑誌、第72号、大正9年6月5日、p.161。
- 60) 桐陰会雑誌、第82号、大正13年11月25日、pp.223-226。
- 61) 佐渡遭難事件に関する詳細は、「桐陰」刊行委員会編、前掲書<sup>29)</sup>p.200., pp.267-275等を参照。
- 62) 日本体育協会編(1959):スポーツ八十年史、pp.403-410。
- 63) 『桐陰』の「空襲下の山岳行軍班」(pp.841-843)には、昭和19年の状況を回顧して、国防訓練色は全くなかったし、当時声高に叫ばれていた「練成登山」の思想とも無縁であった旨の記述が見られる。
- 64) 桐陰会雑誌、第74号、大正10年3月20日、p.104。
- 65) 大日本体育協会編(1927):大日本体育協会史 下巻、p.1018。
- 66) 日本蹴球協会編(1974):日本サッカーのあゆみ、講談社、pp.70-71.によると、ビルマから東京高等工業学校へ留学したチャー・デイン(Kyaw Din)は、東京にある各学校を巡回しながらコーチにあたったとされる。
- 67) 桐陰会雑誌、第84号、大正14年12月20日、p.120。
- 68) ベースボールマガジン社編(1989):激動の昭和スポーツ史9.サッカー編、pp.146-150。
- 69) 『桐陰会籠球部創部60周年 RTOクラブ創設50周年記念誌』、pp.12-13。
- 70) 「桐陰」刊行委員会編、前掲書<sup>29)</sup>、pp.832-833。
- 71) 練習試合を行った学校は東京商船学校、第一高等学校、立教中、八中、九中、青山学院中、一中、六中、目白商業、五中、武蔵高校尋常科、慶應予科、化学工業、東京高等尋常科などで、クラブは暁星クラブ、RMSノビヤクラブ、TNSZ、RTO、Z倶楽部(早大)、山形高校OBなどであった。
- 72) 桐陰会雑誌、第100号、昭和9年7月15日、pp.124-125。
- 73) 同上書、p.140。
- 74) 同上書、p.145。
- 75) 桐陰会雑誌、第102号、昭和10年7月15日、p.135。
- 76) 「桐陰」刊行委員会編、前掲書<sup>29)</sup>、p.774。
- 77) 桐陰会雑誌、第105号、昭和11年12月25日、p.138。
- 78) 桐陰会雑誌、第99号、昭和8年12月22日、p.154。
- 79) 筑波大学付属中学校・高等学校百年史編集委員会編、前掲書<sup>6)</sup>、p.122。
- 80) 「桐陰」刊行委員会編、前掲書<sup>29)</sup>、p.330。
- 81) 桐陰会雑誌、第111号、昭和14年12月25日、p.131。
- 82) 同上
- 83) 桐陰会雑誌、第112号、昭和15年12月24日、p.76。
- 84) 「桐陰」刊行委員会編、前掲書<sup>29)</sup>、p.330。
- 85) 学習院百年史編纂委員会編、前掲書<sup>29)</sup>、pp.862-863。
- 86) 桐陰会雑誌、第8号、明治32年11月10日、p.180。
- 87) 桐陰会雑誌、第15号、明治35年2月28日、p.175。
- 88) 学習院百年史編纂委員会編、前掲書<sup>29)</sup>、p.433。なお学習院は、明治24年から柔道の対外試合(対一高戦)を開始している。同書、pp.268-269。
- 89) 桐陰会雑誌、第21号、明治37年3月17日、pp.130-132。「端艇部々報」を参照。
- 90) 学習院側の記録によれば、明治35年11月と36年11月に、高師附中对学習院の庭球の試合が行われたという。学習院百年史編纂委員会編、前掲書<sup>29)</sup>、p.865。しかし、桐陰会雑誌にはいずれの試合の記録も見られない。
- 91) 桐陰会雑誌、第72号、大正9年6月5日、p.59。学習院は高師附中との試合が断絶している期間も、麻布中、正則中、立教中他と対戦し、おおむね勝利を収めていたという。学習院百年史編纂委員会編、前掲書<sup>29)</sup>、p.863。また学習院は、高師附中との定期戦を「附属戦」と称していた。同書、p.864。
- 92) 桐陰会雑誌、第72号、大正9年6月5日、p.42。
- 93) ただし、桐陰会雑誌の最古の記録は大正14年の「第3回対学習院競技会」である。桐陰会雑誌、第84号、大正14年12月20日、pp.123-125.この競技会が大正12(1923)年から行われていたことは、学習院百年史編纂委員会編、前掲書<sup>29)</sup>、p.868を参照。
- 94) 桐陰会雑誌、第61号、大正5年7月17日、p.142。
- 95) 桐陰会雑誌、第71号、大正8年12月5日、p.93。
- 96) 桐陰会雑誌、第61号、大正5年7月17日、p.81。
- 97) 桐陰会雑誌、第72号、大正9年6月5日、p.35。
- 98) 学習院の各部にとっても、高師附中との定期戦は最も重要視されていた試合であった。学習院百年史編纂委員会編(1981):学習院百年史 第2編、pp.241-270。
- 99) 桐陰会雑誌、第109号、昭和13年12月24日、pp.20-23。